

平成 30 年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

定時制の課程である特性を生かし、地域の教育コミュニティへの参画と活性化を図り、自他の権利や生命を大切にすることを旨とし、安全で安心な学びの場を提供する。また、夢や志を抱き、人生を切り拓くチカラを育成する

- 1 生涯にわたって豊かな生活を築くため、「知識・技能」を修得し、「思考力・判断力・表現力」をはぐくみ、個々のニーズに応じた教育を展開する
- 2 自己肯定感、自他を思いやる人間性を育成し、互いに違いを認め合い「ともに学び、ともに育つ」教育を推進する
- 3 地域社会に貢献できる多様な人材を、様々な体験的活動や外部人材の活用を通じ育成する

2 中期的目標

1 基礎基本の知識・技能の習得と生徒の進路実現

- (1) 「グローバル化」や「情報化」など社会の変化に対応した学習の形態を実施し、生徒の能力・適性・興味・関心に応じた授業展開を行う
- (2) 生きて働く「知識・技能」の習得、未知の状況に対応できる「思考力・判断力・表現力等」をはぐくむため、生徒の実態に合わせた体験活動や ICT 等の活用により「主体的・対話的で深い学び」の実践をめざす
- (3) 多様な生徒に対する進路選択のサポートを強化し、3年間をベースとしたキャリア教育の計画を明確にして充実を図る
- (4) 「生徒が来たい学校づくり」をめざし、欠席・遅刻等の改善をめざす

《成果指標：欠席者総数の減少 H28：6300人、H29：6200人、H30：6100人、2019:6000人》

2 豊かな人間性の育成と共生社会の推進（生徒自らが活気ある学校生活を送る）

- (1) 互いに違いを認め合う共生社会の推進に積極的に取り組み、自尊心と自他を思いやる豊かな人間性を育む
- (2) 学校生活全般の活性化を図り、心身ともに健やかに、人生を切り拓くチカラを育成する
- (3) あいさつ運動の定着化により、社会人として必要な基本的な生活習慣と規範意識を身に付ける
- (4) SSW（スクール・ソーシャル・ワーカー）やSC（スクールカウンセラー）等の活用を通じ、生徒を主役に家庭・地域・外部機関との連携を図る

※「課題を抱える生徒フォローアップ事業」を活用し、2019年度までに文部科学省が公表する平成26年度全国公立高等学校

定時制課程の中途退学率の11.1%以下を目標とする。（中期的目標1～4の全てを通じて）《指標 H28：15%、H29：13%、H30：12%、2019:11%》

3 教職員人材育成と学校運営体制の再構築

- (1) 教職員の人材育成をベースに、チームワーク・ネットワーク等を駆使し「めざす学校像や目標の達成」に取り組む
- (2) 教職員の同僚性を向上し、業務の効率化を見直し「ミドルアップ・ダウン型」の組織作りとミドルリーダーの育成
- (3) 各種委員会の再編と活性化を行い、必要に応じ役割を明示・円滑な校務運営を推進する

《「働き方改革」の取組みとともに、「将来構想委員会」による校務運営体制のチェックおよび各種委員会の再編と活性化を行う》

4 開かれた学校づくりのための取組みを推進する

- (1) 地域との連携や地元中学校および保護者等への広報に努める（Webの活用等を工夫）
- (2) 地域とともに歩み、親しまれる学校づくりに努める
- (3) キャリア教育の充実に外部人材（キャリアコンサルタント）等の活用し、生徒の視野を広げ、希望する進路が実現されるように支援する。

《企業・進学先の訪問 H29:H30:2019のそれぞれの卒業生に対し1回以上支援を継続し、定着指導を実施し共有》

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [平成 年 月実施分]	学校運営協議会からの意見
<p>(1) 昨年度との比較</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「先生は、悩みや相談に親身になって対応してくれる」「学校は部活動に力を入れている」「学校で非常時にどんな行動をとればよいかを知っている。」の項目で肯定的意見が増加(1～2%)、他の項目については減少 ・「先生は、悩みや相談に親身になって対応してくれる」は、生徒・保護者の肯定感の高さと教員自身の評価がほぼ一致し、教員においては、100%肯定的意見である。寄り添う教育の成果が継続している ・いじめの対応については、現象は認知されていないものの生徒についてはやや否定的意見が増加している <p>(2) 生徒と教員及び保護者と教員の回答傾向の比較</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いじめの対応については、生徒より保護者が肯定的である ・保護者と家庭との連絡についても、保護者は60%以上肯定的である ・施設設備については、肯定感が低下、災害による被害もあり、特に教職員の肯定感が低い ・授業についての肯定感がやや減少、支援を必要とする生徒が増加していると考えられる <p>(3) 課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・卒業後を見据えたキャリア教育・進路指導の体制の見直しが進み指導体制が改善されているが、新たに支援を必要とする生徒の進路先開拓などの課題も生まれているので進路のアドバイスの満足度に少し開きが出た ・保護者と学校との協働や関心をさらに高める工夫は依然必要、学校ブログ等での情報伝達は、非常時等では有効と考えられたが、学校自己診断の回収率の悪さは依然課題として残っている。 	<p>第1回：6月8日(金) 一授業見学と昨年度の業績報告および協議一</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒に対して、多様な取り組みをしており継続してがんばって欲しい ・夜間中学校からの生徒の受入れをはじめ、多様な生徒の受け入れについて進めていくのがよい ・資格取得について、生徒の意識をさらに高めて社会に優位な人材を送り出して欲しい <p>第2回：10月11日(木) 一本年度の業績中間報告および協議一</p> <ul style="list-style-type: none"> ・上級学年の中退率が低下してきている、編入・転入の生徒を積極的に受け入れてもよいのではないかと ・遠足や修学旅行の費用や内容の検討で参加者の増加を図っているのはよい ・キャリア教育の取組みで、積極的に外部人材を活用しているのは、生徒が社会に出て行くときにも有効である、ぜひ続けて欲しい ・災害等の非常時の備蓄等の整備については努力されたい ・定時制課程の生徒の支援については、児童福祉のしくみだけでは間に合わないところがあるが、本校のしくみも使って努力を続けて欲しい <p>第3回：平成31年1月31日(木) 一本年度の振り返りと学校経営計画について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ミドルアップ・ダウン型」の経営で、職員会議で議論が必要。 ・学校教育自己診断の内容で、学校の様子がよくわからない保護者への対応が必要。 ・学校教育自己診断のWeb化は？→同一人物が何度も書き込む恐れありで今後の検討を。 ・いじめの行為は認知されていないようだが校内体制は？→校内ケース会議等に対応。 ・中学では不登校だったが、本校に通うようになってほとんど休みがなく通っている生徒もいる。生徒が来たい学校づくりをめざして欲しい。 ・平成30年度本年度の「取組内容及び自己評価」→承認 ・「平成31年度学校経営計画及び学校評価」→承認 ・全日制の「学校経営計画及び学校評価」→承認

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 基礎基本の知識・技能の習得と生徒の進路実現	(1) 能力・適性・興味・関心に応じた「主体的・対話的で深い学び」の実践 (2) 進路選択のサポートを通じたキャリア教育の充実 (3) 「生徒が来た学校づくり」と欠席・遅刻等の改善	(1) ・基礎学力向上にむけ「～ができる授業」を実践し、A Lの手法や体験的活動など、生徒の興味・関心を高める授業展開を工夫する。様々な学校との連携も行う ・生徒の理解度や個々のニーズおよび行動を理解し、具体的に肯定的評価を伝え、生徒の自己肯定感をはぐくむ (2) ・資格取得を含め、生徒のニーズに応じた教科科目の選択や受講指導を実施する ・就職・就業指導の充実のため、公共職業安定所等との連携や企業訪問による就職先の開拓を実施する ・進路情報サイト等の活用や企業団体・各種教育機関なども活用し、生徒のキャリア形成のための視野を広げる ・あらゆる「出会い」を通じて、入学から卒業までのキャリア教育の充実を図る (3) ・保護者との連絡体制・連携の強化を行うとともに、家庭訪問等において組織的に、早期の対応を心がける ・随時に生徒面談を行い細やかな意思の疎通を図る ・「校内会議」「校内ケース会議」を活用し、組織として生徒情報の共有を図り、生徒支援に役立てる	(1) ・様々なタイプの学校との相互交流等を年3回実施し、授業改善の工夫を行う ・観点別評価の共有・改善の実施 (2) ・キャリア支援のための生徒の活動を充実させる ・応募前職場見学会や企業訪問を積極的に実施（昨年度維持のべ40～50人前後を目標） ・進路決定率を前年度比2%増（H29年度末92.0%） ・卒業後のフォローアップを実施 (3) ・生徒・保護者への電話連絡・家庭訪問等を組織対応で行う ・出席率を前年度比2%増（H29年度約80.1%） ・遅刻・早退率の2%減少（H29年度末32.1%）	・研究授業を年4回実施し、他校からの参加はのべ3名。授業公開週間も設け中学校の先生方の授業見学も8名参加。研究協議では観点別評価の共有・改善について評価（◎） ・キャリア教育の一環で「模擬会社説明会」「進学説明会」など外部人材を活用した活動が充実した。（◎） ・応募前職場見学会・合同求人説明会の参加者はのべ23名（内応募前会社見学会のべ16名）参加人数は減少したが決定率は96.6%（○） ・生徒サポートチームを中心に、対応が困難な事案も対応できた。SSW, SCの活用が進み保護者の相談でも信頼が得られている。（◎） ・出席率は8%減少、遅刻・早退率は5%減少した。（○）
2 豊かな人間性の育成と共生社会の推進	(1) 円滑な人間関係を築くためのマナーや規範、人権意識の向上 (2) 安全安心な学校環境の整備と多様な学びの場を提供 (3) 生徒会活動・部活動の活性化	(1) ・登校時における校門前の「あいさつ運動」の継続と、授業の開始・終了の「起立・礼」を励行する ・身近な差別事象や人権問題を取り扱い、問題の正しい理解を深め、関係機関や専門家と連携し「豊かでたくましい人間性」をはぐくむ ・薬物乱用防止教室、交通安全教育などは、具体的・体験的な内容の充実を図り、生徒の「自らの命を守り抜くための『主体的に行動する態度』」をはぐくむ ・スマホの使用など情報機器の使用マナーをはぐくむ (2) ・正門前の緑化運動（季節の花植え）と冬季のイルミネーションでの生徒の迎え入れの継続。 ・生徒の活動場所の照度点検と安全な作業のための環境整備を実施する。 ・「課題を抱える生徒フォローアップ事業」を活用し、これまでの支援体制を継続・発展させ、SSW・SCを含めた「校内ケース会議」の充実を図り、個々の教員との連携も強化して、地域の福祉等外部組織との協働を充実させながら、安全・安心な居場所づくりをめざす ・「いじめ」の対応についても上の体制で実施する。 ・学年団や分掌等、あらゆる場面での組織的対応の実践を通じ、効率的な働き方の検討を進める (3) ・生徒会活動やクラブ活動のさらなる活性化 ・社会の教育支援に関わる人材の活用を図る ・生徒会活動を通じ、学校の中核となる生徒を育成する ・文化祭等の学校行事へ保護者等にサポーターとして参画を促す	(1) ・授業開始、終了時の挨拶実施の励行と定着を、年間の授業観察を通じ、指導・助言する ・学校教育自己診断の生徒の人権に関する設問で肯定的な回答率5%向上（H29年度は52%） ・「スマホマナー教室」等の実施 (2) ・学校薬剤師と連携して照度の把握に努め、安全な学校づくりのため施設改善 ・「校内ケース会議」のさらなる充実と本校の成果についての情報発信を行う ・SSW、SCの活動をつなぎ、地域の支援組織等との連携、保護者の協力による家庭環境の充実で中退防止・進路実現を図る (3) ・部活動参加者の維持（H29年度のべ122名） ・学校周辺の清掃を含め、地域との活動を活性化（年5回） ・文化祭等での生徒の主体的活動の充実と保護者の参加者数の増加（H29年度 外部からの参加者65名 内保護者31名）	(1) ・授業観察で授業環境が整えられた授業がほとんどであった。（○） ・本年度の生徒向け人権研修は「ハラスメント」について実施。生徒の真摯に聞く態度が見られた。（○） ・人権に関する設問の肯定的解答が45.2%に留まった。（△） ・「様々な依存症」についての外部講師による教室を実施した。（○） (2) ・災害による被害等もあり、施設改善には課題が残った。（△） ・SSW、SCの活用の本校の成果について、他校との情報交換や実績報告を発信した。（◎） ・市町村関係部局やNPOおよび地域の企業とも連携しながら、学業の継続・キャリア教育の推進を進めることができた。（○） (3) ・部活動参加者の維持（△）（H30年度のべ58名/在籍83名） ・天候不順等で実施回数が計画より減少した。（△） ・生徒会の主導で文化祭が実施でき、参加者数は増加（H30年度 外部からの参加者87名 内保護者61名）（◎）
3 人材育成と学校運営体制の再構築	(1) 開かれた学校づくりをめざした取組み (2) 「ものづくり体験学習」・オープンキャンパス等を通じた人材育成	(1) ・秋季発表大会・産業教育フェア等への積極的参加を教員全体で取組み、教育活動の成果を地域に広報する ・エコデンレースの開催に向け、次世代の事務局づくりを意識した運営体制を教員全体で強化する ・学校周辺地域の清掃活動を継続する。 ・文化祭等の学校行事への近隣住民・中学校教員を招き、学校の状況を知らせ、意見を今後の学校運営に資する ・夏季休業期間を利用して地域の児童・生徒、保護者・小中学校教員対象の「ものづくり体験学習」を実施する ・全日制教員と定時制教員のコラボで協力して進める ・冬季学校説明会を「ものづくり」を主体に全員で実施 ・学校自己診断等を含め、保護者の学校活動への参加を推進する。 (2) ・研修および研究授業の充実で「学び続ける教員」を育成する ・普通科、工業科の教員の連携を図り、全校一斉退庁日なども活用して、業務の効率化を「安全衛生委員会」「将来構想委員会」等で構築する。あわせて、産業医の助言も活用し、「働き方改革」にむけて取り組む	(1) ・様々なイベントでの生徒参加を充実させ、学校 Web 等で情報発信を行い中学校へのアピールを行う。（更新を月1回以上） ・生徒と教職員による、年10回程度の地域清掃の定着を図る ・文化祭等の学校行事への外部参加者の維持（H29年度のべ75人） ・他校での授業参観などの機会を増加（3回以上実施） ・「ものづくり体験教室」参加者数の維持（H29年度40名） ・冬季学校説明会参加者の増加（H29年度8名） ・学校自己診断の回答率5%増加 (2) ・同僚性の向上および、互いに切磋琢磨する職場づくりをめざす ・定時退庁等の周知徹底を図り働き方に対する自覚を促す	・秋季発表大会・産業教育フェア等への参加は例年並みであった。学校ブログのシステム変更に伴い、教員の書き込みが増加し、更新が月1回以上行われている。（○） ・地域清掃の定着を図るための計画はできていたが、天候不順等で実施回数が減少した。（△） ・文化祭等の学校行事への外部参加者は増加した（H30年度87人）（◎） ・「ものづくり体験教室」参加者数は40名で、受入れ人数を上回る希望があった（◎） ・冬季学校説明会参加者は6名（△） ・学校自己診断の回答率が4%低下した（△） (2) ストレスチェックによる同僚の支援の指数が0.3増加（○） ・特に問題となる時間外労働については見られない（○）